第18758号　日刊（土日祝除く）　昭和26年7月11日第3種郵便物認可

スイケイ　https://www.suikei.co.jp

日刊 水産経済新聞

THE SUISAN - KEIZAI

2024年（令和6年）6/24（月）Monday

発行所　水産経済新聞社　〒106-0032 東京都港区六本木2丁目1番13号 六本木MYビル3階　☎03-5544-9831（代）FAX 03-5544-9837

TODAY'S NEWS

全漁連坂本会長ら総会後に会見 2

山﨑新体制が始動 築地魚市場 3

特集

日かつガイダンス 宇和島水高で 3

次世代へ鰻愛 6

スイケイマーケット

米国4月エビ輸入5万㌧ 5

DAPスケソウ、Bシーズン開幕

太平洋側の種卵不足も懸念

道総研さけます水試予測

過去最低の25%減1703万尾

【札幌】道総研さけます・内水面水産試験場は21日、今年の北海道への秋サケ来遊予測値について、前年比24・5%減の1703万尾と発表した。2017年（1737万尾）を下回る過去最低水準の予測値となる。昨年は全道共通して3年魚の回帰が少なかったことから、主群となる4年魚の回帰が多くを見込めないことが大きな要因。太平洋側のえりも以西海区やえりも以東海区では大幅な種卵不足も懸念されている。

秋サケ来遊

今年の「秋サケ親魚捕獲および適正利用を図るための実施方針」を決める道連合海区漁業調整委員会の席で、同水試さけます資源部のト部浩一研究主幹が説明した。

昨年の北海道への秋サケ来遊数（沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計値）は予測値（3483万尾）を大きく下回り、前年比35%減の2257万尾に終わった。年齢別にみると、4年魚（19年級）は前年比35%減の1552万尾と大幅に減少。5年魚（18年級）は499万尾と前年を上回ったが、平成以降で4番目に少ない値となり、3年魚（20年級）は200万尾と過去10か年平均の75%にとどまった。

今年もこれまで同様、前年の3年魚・4年魚から今年の4年魚・5年魚を推定するシブリング法を基本に来遊数を予測。

近年は急速な成熟年齢の若齢化が進んでいることから、21年以降は若齢年級のデータだけを用いて分析している。しかし、昨年4年魚として回帰した19年級は予測値を大幅に下回るなど、近年は予測値より下振れする年が多くなっていることから、予測精度を高めるため、今年は最近の若齢年級のデータにウエートを置いて分析した。

その結果、今年の来遊数は1703万尾と予測された。昨年は全道的に3年魚が少なく、今年4年魚としての回帰が期待できないことから、海区別・地区別にみても前年をさらに下回る過去最低水準の予測値となっている。

年齢別には5年魚が471万尾、4年魚が1003万尾、3年魚が204万尾。期別では前期835万尾、中期779万尾、後期90万尾と予測している。

海区別では唯一、えりも以西海区が昨年を上回っているが、「昨年が悪過ぎたためで、過去最低水準の来遊が続くことに変わりはなく、特に噴火湾地区と道南地区は昨年をさらに下回る危機的な状況」という。

来遊数のうち、河川遡（そ）上数は約222万尾と推定されているが、種卵不足が見込まれる海区・地区も多くみられ、特にえりも以東海区やえりも以西海区、日本海南部地区などでは大幅に不足すると推定されている。

2024年秋サケ地区別来遊予測

海区	地区	24年予測値（千尾）	23年来遊数（千尾）	前年比（%）
オホーツク	東部	6,195	8,615	71.9
	中部	3,036	4,604	65.9
	西部	2,249	2,737	82.2
	小計	11,480	15,956	71.9
根室	北部	1,731	2,142	80.8
	南部	520	628	82.8
	小計	2,251	2,770	81.3
えりも以東	東部	480	576	83.5
	西部	655	802	81.7
	小計	1,135	1,378	82.4
えりも以西	日高	262	193	135.6
	胆振	162	93	173.6
	噴火湾	52	61	85.2
	道南	55	92	59.5
	小計	531	440	120.7
日本海	北部	707	853	82.9
	中部	741	922	80.4
	南部	184	248	74.1
	小計	1,632	2,022	80.7
北海道総計		17,029	22,566	75.5

豊洲の旬

生鮮カツオ

気仙沼産がまとまる

ようやくシーズン本格化

27年連続カツオ水揚げ日本一の宮城・気仙沼港に20日、まき網のカツオが一度に520㌧水揚げされたことで、高値傾向だった東京・豊洲市場の生鮮カツオは、入荷数量が増えて単価も軟化し、ようやくシーズン本格化といった様相をみせた。

東京都中央卸売市場の週間市況によると、一日平均上場数量は5月から50㌧を超えることがなく、相場もキロ500円台後半から700円台と高値傾向であった。しかし、21日の数量は57・5㌧（東京都中央卸売市場日報から）と急増、単価も500円まで下落した。

卸担当者によると、急増した気仙沼物は「水揚げの主体が2・5～3㌔と量販店・スーパーが扱いやすいサイズ」「身には脂もある」と高く評価した。

今シーズンの初ガツオは、4月から主体となる千葉・勝浦が出遅れ、5月からは好調だったものの、6月後半から早期に失速気味だったことから、カツオの入荷が不足気味だった。

その状況下で、漁場が「三陸北部まで北上」し、気仙沼でまとまったことで、卸担当者らは販促に力が入る。

まき網物がまとまった理由として、今年は昨年同時期より旬のマイワシが宮城県沖以南は激減。塩釜のクロマグロの水揚げもまちまちなことから、大型まき網船がカツオ狙いの傾向にあることを挙げている。

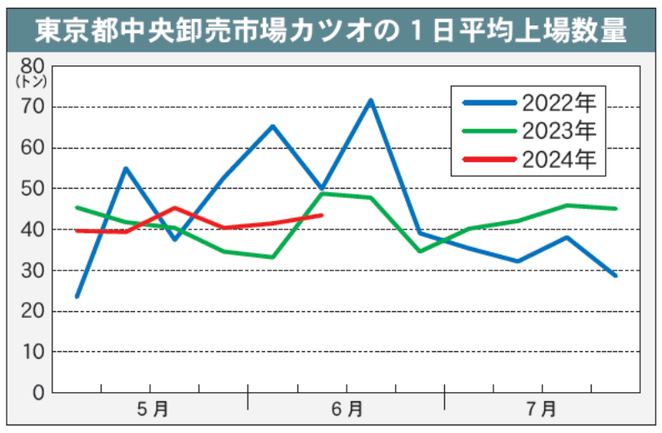
一方で、一本釣りはようやく沸いたビンナガ狙いにシフトしたことで、カツオは「まき網頼りとなった」「安定的な入荷は断言できない」と、決して楽観できない状況。

一般的に生食主体のカツオの方がビンナガより高単価で取引されるが、カツオは刺身商材のため1日物以降、価値が下がる。鮮度劣化が早いため量販店・スーパーでも「即日即売」が一般的だ。

しかし、ビンナガは加工向けとして陸凍が前提なことから、3～4日物でも価格が安定。カツオを狙い漁場と漁港を行き来して燃料を費やすよりも、日数をかけて大量にビンナガを水揚げした方がもうかると、ビンナガが獲れるうちは釣り物のカツオの入荷は乏しくなる。

今後は、一本釣りのビンナガが途切れるまで、まき網がカツオ主体で水揚げすることに期待。ここまでカツオは出遅れ気味だっただけに、初夏の巻き返しなるかに注目だ。

東京都中央卸売市場カツオの1日平均上場数量



東京都中央卸売市場カツオの取引価格中値　（単位：円/㌔）

	5月				6月				7月			
	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週
2024	700	700	580	550	720	580						
2023	750	570	580	540	870	720	460	600	560	590	500	420
2022	933	460	580	460	490	560	490	780	820	610	590	660

東京都中央卸売市場　市場取引情報　週間市況から

ホタルイカ

富山13年ぶり首位

過去最多の4000㌧超　兵庫抜く

富山県農林水産総合技術センター水産研究所がまとめた同県5月末時点の主要魚種の漁獲量（漁獲旬報）によると、富山湾のホタルイカ漁は2024年シーズン、記録が残る1957年以降で最多水揚げだった92年の3895㌧を更新し、4068㌧に達した。12年連続1位だった兵庫県の1～5月の水揚げが2870㌧だったことから、13年ぶりの首位交代があったもようだ。

過去最低の418㌧に終わった前年から一転しての大豊漁となった。ホタルイカ定置が解禁となった直後の3月上・中旬は目立たなかったものの、3月下旬から大幅にペースアップして、3月だけで1000㌧超えの1153㌧をまとめた。

4月になっても勢いは衰えず、中旬にはわずか10日間で1023㌧をまとめるなど、月間で2606㌧を漁獲し、過去最多水揚げを視野に入れた。5月の大型連休明けに急激に失速はしたものの、5月も306㌧と2018年以降では最多となる上積みがあり、4000㌧の大台に乗せた。

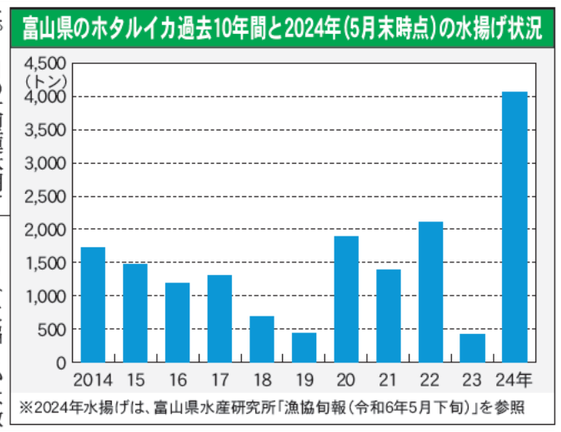
漁期の最終盤となる6月は14日を最後に水揚げが認められておらず、月間で10～20㌧前後の上積みにとどまるとみられ4100㌧に届くかは微妙。ただ、マーケットにボイル品や加工原料として潤沢に供給されたことで、今後への期待が膨らんだ一年となった。

地区別にみていくと、上位1～3位は新湊（射水市）1169㌧、魚津（魚津市）753㌧、四方（富山市）744㌧の順位となった。4位以下には滑川（滑川市）676㌧、水橋（富山市）519㌧、岩瀬（富山市）176㌧、氷見（氷見市）25㌧と続いた。

他県の水産研究機関がまとめた24年のホタルイカ水揚げをみると、兵庫が1～5月で2870㌧（前年比8%増）。11年に富山が2476㌧、兵庫が2398㌧だった時以来の首位交代が確実となった。

そのほかでは、鳥取が1～4月で570㌧（123・5%増）、福井が1～5月で291㌧（18%増）と続いた。傾向としては前年実績は上回ったが、平年比では兵庫と福井は大きく下回り、鳥取は若干増となった。5月以降に急激に獲れなくなったのは富山県と共通している。

富山県のホタルイカ過去10年間と2024年（5月末時点）の水揚げ状況



※2024年水揚げは、富山県水産研究所「漁協旬報（令和6年5月下旬）」を参照

餌など踏み込んだ調査を

チャタムフィッシュ第2クール

世界に誇る評価確立へ提言

水産資源の回復と持続可能な水産業を学び議論する「チャタムフィッシュ」（事務局・UMINEKOサステナビリティ研究所）は20日、第2クール（4～6月）の議論について報告した。議題の一つ「資源評価の確立」については、これまでの手法から一歩踏み込んだ調査として、餌との関係のほか、重要種には能動的な漁獲調査の実施、産業種ではないが重要といわれる種にも調査の範囲を広げる必要性を提言した。

チャタムフィッシュは、自由で忖（そん）度のない提案を行うため、今年から漁業者、研究者らをメンバー（非公開）とする議論をスタート。よりスピード感を出すために3か月に1度の議論の結果を報告している。

この日は、事務局代表の桑井真氏と顧問の宮原正典氏（よろず水産相談室afc・masa代表）が会見した。

資源評価手法の確立については、「世界に誇る資源評価の確立に向けた、環境変動・生態系を考慮した資源評価手法の確立」をテーマに議論を実施した。そのための調査の具体的な事例として、想定を上回る資源の回復がみられるクロマグロについては「魚そのものの資源調査に加え、何を食べているのかなど、餌との関係にも着目した調査の実施」の必要性を強調。

資源的な安定がいわれながら漁獲に結び付いていない三陸沖などの太平洋マサバについては、「分布変化と基礎生産の変化の調査の必要」を提案し、「例えば、水温上昇の影響で深層に沈んでいる可能性のあるマサバなどは、盛漁期を前に集魚灯の使用を認める漁獲を調査として実施するなど、漁業者にもメリットがありデータ収集にも役立つ仕組みが必要ではないか」と提案。

産業的には価値がなくても水産資源に大きな影響を及ぼすといわれる「ハダカイワシなどの種も調査・研究の対象にすべきだ」など、評価の高度化に向けた具体的な調査手法を提言した。データ収集方法では、データの充実に加え、国民の魚に対する問題意識醸成効果も含め、沿岸の対象種を中心に「市民参加型のデータ収集」の必要性も唱えた。今回整理された議論の中身は近く水産庁にも提案する。

なお、第2クールで継続議論となった「資源管理に取り組む漁業者に必要な資金対策の枠組み」については、資源が傷んでいる状況から早急な回復を目指すための支援方法の見直しの必要性について議論。例えば、過去の水揚げをベースとした現状維持型の収入安定対策などの支援ではなく、将来にいい状況にするための「将来型」の支援の枠組みの必要性について意見が交わされたが、「次の第3クールでより議論を深め具体案を提示していく」（事務局）という。

コートジボワール

坂本大臣に勲章を授与

水産で良好な関係築く

コートジボワールから来日したシディ・ティエモコ・トゥーレ動物・水産資源大臣は21日、農林水産省を訪れ、坂本哲志大臣を表敬するとともに、長年にわたって両国が水産分野で良好な関係を築いてきたことに敬意を表して農事功労賞（勲章）を授与した。寿司チェーンを展開する㈱喜代村の木村清社長らも同席した。

坂本大臣は「海洋資源の持続的利用の重要性について信頼を共有している。これまでのわが国がコートジボワールに貢献してきた人を代表して受け取りたい」とあいさつ。トゥーレ大臣は、同国における船着き場の建設など日本の支援に言及しつつ、「良好な関係を続けることはすべての産業において重要なことだ」述べ、勲章を授与した。

トゥーレ大臣（㊧から4人目）から坂本大臣（その㊨）に勲章が授与された

海づくり大会の招致表明

千葉県　27年の開催へ

【千葉】千葉県の熊谷俊人知事は19日の定例議会で、2027年の「第46回全国豊かな海づくり大会」の招致を目指す考えを表明した。開催に向け豊かな海づくり大会推進委員会へ申請を行い、同委員会が受諾すれば、千葉県での開催は1992年の第12回大会以来2回目となる。

大会は例年、天皇・皇后両陛下がご臨席される地方行幸啓の一つ。水産資源の管理や保護、海および湖沼・河川など環境保全の大切さについて広く国民に訴え、漁業の振興を図る目的で毎年開催されている。

今年は11月10日に大分県で第43回大会を実施、以降は25年が三重県、26年が大阪府で開かれることが決まっている。

中国公船が領海侵入

尖閣沖、日本漁船に接近

沖縄・石垣市の尖閣諸島沖で20日午前と午後、中国海警局の海警が日本の領海に侵入した。日本漁船に接近しようとしたため、海上保安庁の巡視船が漁船の安全を確保し、領海外へ出るよう警告した。尖閣諸島沖での中国公船の領海侵入は7日以来で、今年18～20回目。

【おことわり】本日「記者席」休載します。